

## 子どもの商業的性的搾取に反対する活動を通じて

武田明恵・飯田 綾

司会 第二セッションは、「子どもの商業的性的搾取に反対する活動を通じて」というタイトルで、お二人の方をお呼びしてお話を伺うということになっています。

私のすぐ隣にいらっしゃるのが飯田綾さんと、アジアの女性と子どもネットワークというNGOの若者のリーダー的な存在の方です。そして、その隣にいらっしゃるのが武田明恵さんと、今高校二年生です。フェリス女学院高校に通っています。このお二人から子どもの商業的性的搾取のセッションをやっていたかどうかということ、ぜひ協力して、みんなでやってみていきたいと思います。

では、お願いします。

武田 今紹介していただいた武田と申します。よろしく申し上げます。

今回は、皆さんで子どもの商業的性的搾取についてまず学ぼうということ、この本をみんなで読もうと思います。

(以下、『子どもの権利を買わないでーペンとミニーチャのものがたり』を出席者が順番に声を出して読んでいく。)

武田 ありがとうございます。

ここでちょっと、この絵本を読んだ感想を聞いてみたいと思います。

どなたか、いらつしやいますか。

じゃ、クリンの役をやっていた方に言ってもらっていいですか。

— 私ですか。

武田 はい、お願いします。

— この文を今皆さんと一緒に読んでいって、私は年を重ねておりますので、経験というか、もちろん女性ですからあれですけども、日本にも昔、赤線というところがあつて、田舎の貧しい女の子たちが買われていったことを今ふと思い出して、日本はこういうふう非常に豊かな生活をしておりますけれども、やはり昔、日本であつたことが、まだ東南アジア、途上国で行われている—とは限らないのかもしれないけれども、私、女の立場から言わせてと、母親の立場から言わせてもらつと、男性も少し自重していただいて、女性を買わないようにというふうな、そういう教育も必要じゃないのかなと、そういうふう思います。

武田 ありがとうございます。

— どうですか。

— はあ……。いや……。そういうことがあるというのは耳には入っていますけれども、具体的な事例として聞くと、やっぱり違うなあつて思います。

武田 ありがとうございます。

じゃ、プンの役をやっていた方に聞いてもいいですか。お願いします。

— この間、テレビで日本人が捕まったつていうのをちょうど見ていて、すごい心にしみました。日本人もそういうことを海外でやっているつていうことに対して、恥ずかしさというのをすごく感じました。

武田　そうですね。この間、捕まったんですね。子ども買春はニュースとかって知っていらっしやる方、いらっしやる方も。ああ、すごい。ありがとうございました。

こういう子ども買春っていうのは、今でも他国で起こっている大変重大な問題だと私も認識しています。この本も、書いた方にお会いして今回お聞きしたんですねですけども、本当にあった話をもとにつくられたそうです。このプンとミーチャっていうのも本当にタイとかにいる子どもの話でーミーチャが亡くなったんでしたっけ、この話では。インタビューしたときは生きていたんですけども、結局どっちの子も亡くなっています。原因はエイズです。

こういう職業に従事している子どもというのは、一〇〇万人以上いると言われています。でも、政府の統計では二〇万人とあって、一〇〇万人って出したのは、NGOとかそういう関連しているところが出していると思うんですけども、すごく差があつて、実体がかみにくく、対策っていうのもいろいろ出てきてはいるんですけども、完全なものとは言えなくなっています。

そういうところで働いている子どもたちの大半がエイズにかかってしまうという現状もあるそうだと聞きます。今でも被害者はずっとふえ続けていて、日本から海外に買いに行く大人っていうのも、まだ全然減っているわけではない。昔は、セックスツーリストっていうか、子どもを買いに行く旅行というのが大っぴらに広告としてあつたそうです。今は規制をされていますけれども、やっぱり向こうに行けば買っている、出張に行つて向こうで買っているっていう大人も多いそうです。タイなどの地元の人たちも子どもを性的に買っているっていう現状もあるようです。

その人たちがなぜ子どもを性的に買うかということを考えてときに、「子どもだとエイズにかかっていない」という思い込みとか、「処女を買うと出世する」とか、そういう神話的部分もあるということを書きました。

先ほど、プンの役をやつてくださった方がおっしゃつていたように、国外犯が逮捕されたんですけども、それも九九年

に児童買春禁止法が成立して、それからやっと一件目なんですよ。ほかの子どもポルノの罪では二件、一応逮捕があったんですけども、子ども買春はやっと一件なんですよ。でも、その人だけがやっているわけじゃなくて、海外ではもっとたくさんの方が、日本人が、子どもを買ったりしているようです。子ども買春はなくなっているわけじゃなくて、見えていないだけで、法律もあって規制できるのに、やっと二年かけて一件しか取り締まれないというのが現状なんだそうです。

タイ等、東南アジアは物価が低いから、日本人がそこに別荘を買って、そこに子どもを買って監禁して、一週間か二週間とか、そういう形で性的虐待を加えるというケースもあるときいています。かといって、その人がその国で逮捕されても、保釈金というのを払えば出てこれてしまつて日本で悠々と暮らしているのが現状だそうです。

ここまでで東南アジアや、アフリカ等に、日本人が買いに行っている現状は、すこし説明できたと思うんですけども、実際に日本でこういうことが起きているか、起きていないかということについては、ちよつと手を挙げてもらおうかな。

日本で「子どもの商業的性的搾取」というのが行われていると思う人、手を挙げてみてください。―じゃあ、それはどういふものなのか、手を挙げている人に聞いてみます。

― どういうものだと思いますか。

― 例えば、出会い系サイトとか、伝言ダイヤルとか、そういうようなもので、興味半分でそういうものに……。

武田 はい、ありがとうございます。

ほかに何かありますか。それじゃ、その辺でお願いします。

― 援助交際とか……。

武田 ほかにありますか。―じゃ、そんなところで。

そうです。日本でもこういう問題は起こっています。私がない頭を振り絞っているいろいろ考えたんですけども、援助交際

の中の問題を、例えば日本の問題として取り上げるときに、やっぱり出会い系サイトというのも援助交際の手段として使われたりとかするわけじゃないですか。いろいろ資料とかを見ていると。かんたんにつかえることがよくもわるくもなりますね。――まず聞いてみちやおうかな。

援助交際ってというのは割合として、学生、高校生が多いか、大学生がやっているのが多いか、主婦がやっているのが多いかって、ちょっと手を挙げてみてもらえますか。

高校生が多いと思う人。――大学生が多いと思う人。――主婦が多いと思う人。――ありがとうございます。

確かに高校生でやっている子はいます。でも、本当にマスコミが言うぐらい高校生イコール援助交際みたいな事が成り立つのか本当に高校生で援助交際というのがたくさん起こっているのかということは問題です。と考えたときに、それは違っていてという統計が出たんですよ。女子高生の割合って少なかつたんですよ。私はそれにすごくびっくりして、統計をとった方がいらっしやあって、その人の本を読んだんですけれども、私はテレビとかそういうのを見て、「ああ、女子高生ってやっているんだ」とか、「友達とかもやっているのかな」とか思っていたんですよ。でも、友達に聞いてもやっている子はいなくて、逆に、「あんた、やってるんじゃないの」ぐらいの勢いで。でも私もやっていなくて。それで、本当は主婦とか大学生とかの方が多かつたんです。私は、ああ、しまった、だまされたと思っています。でも、高校生でもいますけれども、子どもと呼ばれる一八歳未満、（先ほど川崎の方も言っていたんですけれども）「一八歳未満の子どもがそういう職業に従事している、援助交際がそうだ」という、日本の子どもの商業的性的搾取例イコール援助交際だという断定はよくないのかなっていうふうに思ったんですよ。あと、援助交際「搾取」の構図が全てにおいてあるわけではないのです。

私は、援助交際についてちょっと考えたときに、結構割がよくていい仕事かなっていうふうにも、ちょっと思っちゃう部分分は否めなかつたんですね。というのは、自分の要らない制服とかそういうものを売ることも援助交際に含めたとしたら、

そういうものも結構高価な値段で売れるし、別に「実害がなければ」っていうふうにならなかつても、思っちゃう自分には罪悪感を感じていたんですけども、そういう職業っていうのは職業的には、経済的には成り立つんだなっていうふうに思ってた。

援助交際をした人が捕まった時、どの法律で裁くのか。世間では取り締まるときに、援助交際をやっている子とかを性非行というので、青少年育成条例とか淫行処罰規定とか、そういう法で「やっている子」をまず裁くんですよ。でも、それを聞いたときに私は、「あれっ!」って思ったんですよ。あの物語でプンとかミーチャとかが買われたときには、男の人が買うのが悪いっていつて裁かれて、プンとかは保護されているのに、何で日本では女の子が性非行とか呼ばれて取締りの対象になるのかな、それはおかしいのではと思いました。それで、大人の場合を考えてみたんですよ。そうしたら、やっぱり大人の売春のとりしまりの際、使用される売春禁止法というのは、世の中の風土を乱す売春者が悪いと言って、売った側が裁かれるっていうのがわかって、疑問を覚えました。

話に聞くとところによると、高校生でやっている子で、自分の生活のためにやっているっていう子もいるんですよ。それは、家に帰ると殴られてしまうからとか、そういった理由で、自分でアパートとかを借りて、高校に行くために時給何万とかで働いているっていう子もいるとききました。でも、そういう子、私はある意味立派だと思うんですよ。自活ということ自分でしているわけですから、立派な労働者に見えたんですよ。大人も売春している人は捕まえたりとか、風俗とかそういうのは一応経済的に成り立っていたりするのに、同じことを子どもがやったら性非行といって、自分できめて、自活のためにやっている子どもまでも罰せられてしまうのかということに、疑問を持ちました。みえない強制力がそこにはあるかもしれないです。そしたらやってる本人ではなく、その強制力をとりのぞくべきではないでしょうか。

今私は、その子が自分で決めてって言ったんですよ、いわゆる自己決定というものをしたんだから、それを周りか

らとやかく言う必要はないのかなというふうに自分で思ったんですよ。それは、ほかの本とかも読んでいても、その人の自由ってというのは、他人に被害が及ばなければ、たとえ自分に被害が及んでも自分が好きなようにしていいみたいなのが自由だっというふうに書いてあったから、それは自由なのかな、他人から強制される必要はないのかなっというふうに思ったんです。援助交際自体を子どもの商業的性的搾取の例にするのも場合によりけりだと思います。

そこで立ちどまって考えたときに、援助交際そのものがいいのか悪いのかっていうのは、私にはわかりません。その子が決めるに当たって、決めた要因というのが幾つかあるわけじゃないですか。その要因となる、材料となる情報というのはどこから得たのか。例えば私の場合は今みたいに、援助交際はたくさんのが高校生がやっていると思っていたわけで、それを理由に「やってもいいんじゃないの」というふうに私が思っていたとします。そうしたら、その、たくさんのが高校生がやっている、その情報はまちがっていましたよね。そしてそれはどこから得た情報かと思ったら、メディアからでした。そういうことをうのみにした自己決定はまちがいもあるのではないかと思いました。

私なりのほかの情報源を探ってみたときに、学校だったんですよ。学校の性教育を考えてみました。そこで、教科書に載っていることとか、テストとか、ひっくり返して見てきたときに、私は「性教育」っていう名前で暗記をしていたなっと思ったんですよ。心の中のことを勉強するとか、性に対することを学んで、自分がどうして生まれたのかとか、セックスはどうしてするのかとか、そういう部分を含めてすべて暗記をしていた気がしたんです。でも、暗記だけで、文章で書いてあることだけで自分の心の中っていうのは決まっているのか。そう考えると自分で考えて自己決定に至っていないのかもしれないかと思いました。となると、自己決定の要因の信ぴょう性を考えると自己決定をしているから他人からとやかく言われる必要がないとか、そういうところにもまた、疑問が生まれてきました。

ここまでで、ちよつと私が援助交際に対して思ったことを言っただけなんですけれども、子どもを強制的に買う大人っていうの

は私は信じられません。

しかし私も自分の中で、性をうること自体は悪いことなんだとか、いいことなんだとか、判断できていないです。だから、そういう自分に疑問を持っている。私ができているのは、私が生きてきた過程で今私がいるわけで、その過程でそういうものを得ていないのではないかと思います。性教育とか、そういう部分にもかかわってくるかもしれないですけども、大人で私にそういうことをちゃんと教えてくれた大人っていうのは本当にいたのかなとか、お母さんと性のことで話して、援助交際をしてもいいんじゃないかと言って、怒られたことはありますけれども、怒ったぐらいで、何でだめなのかとか、そういうところまではちゃんと教えてもらったかなっていう疑問が浮かびました。性のことについて、大人にきいても、理解できる返答はかえってこないんです。

そこまでで一応、日本の問題の第一目。援助交際のとらえ方については終わりにします。

私が見つけたもう一つの問題は、隣にいる綾さんのワークショップ、勉強会に参加したときに、世界にある子どものポルノの七〇％を日本がつくっているっていう文章を見たんです。そこで、私は、「何だと！」っていうか、怒りを覚えたけれども、私は見たことがなかったんですよ。書店に並んでいるものも、子どもの目に触れるようにヌード写真とか置いてあって、それはよくないなというふうには思ったけれども、それが子どもだったことはなかったんです。

でも、インターネットで検索のところに「美少女ポルノ」って入れたら、本当かは定かでないけれど、五、六年から中高生画像を表す文字がたくさん出てきたんですよ。すごいびっくりしました。自分の親が子どもの成長を写すっていう形にして子どもの裸を撮っていたりしていました。それを、見たところでは、ことしの六月に始まって、それから今までで、私たちが、のべ約三八万人目あたりだったんですよ。それだけの人の目にさらされているこの写真があるんだということに気づいて、すごくびっくりしたんですよ。「何とかちゃんの成長を見守ってください」とか、横に書いてあったけれど



も、その子がそういうことを本当に望んでいるのかなって考えました。詳しく見ていたら、その写真は合成にみえたんですよ。だから、必ずしもその子が望んだ写真であるわけではないのでは、と思いました。

ひどいものではそういう性的虐待シーンを写真におさめて載せているものもあるそうです。その子は抵抗できなくて、その場面を撮られているわけじゃないですか。その子の人権を考えているのか、その子の成長を本当に、見守ってほしいのか。そういうものではなく私には思えたんですね。

そのほかにも、「子役のアイドルの顔だけその子で、下は大人の体で」とかで、そういうアダルトビデオとか、写真とか、そういうのも出回っていました。でも、うちは、知っている方もいらっしやるかもしれないですけども、ノートンっていう特定の語の入ったサイトを遮断しちゃう機能がついていて、結構入ってこない部分もあったんですけども、入ってくる分でも相当のものがありません。

そういえば私、一七才で子どもなんですけれども見れたんですよ。私が一八才未満の子どものものに、ちょっとさわっただけで（クリックで）そういうものも見れてしまう。しかも映っているものは子どもの裸。そういう違和感というか、不思議っていうか、矛盾っていうものをすごく感じました。そしてこういうところでも、日本の子どもは性的に搾取されているのだと思いました。

先月の二三日に、日本はサイバー条約というのに加盟しました。そこには、「あからさまな性行為を行っているように表現する写実的な画像」と明記されています。あからさまな性行為を行っているように表現する写実的な画像をきのも見たんですけれども、私はインターネットで見ました。規制されていませんでした。法律ができて、この間が一件目だったみたいなのに、条約はあるけれども、法律もあるけれども規制できていないっていう現実は、今あるようですよ。

そういう無防備なかたちでパソコンをいじって子どもがそういうものを見たらと思うと、危ない管理体制だなんていうふうに思いました。

これは私が見た一部ですけども、今の日本の現状です。

子どもの権利を守るための条文を読んだんですけども、子どもの権利条約とか、それにも書いてありますけれども、あと、さっき言ったように、九九年にできた法律なんですけれども、子どもの権利を守るのに、条文が子どもが読んでもわからない条文ばかりでした。子どもの権利を守る法律なのに、子どもが読んでわからなくて、守りたい権利がある子どもが読んでわからない法律というものに、矛盾を覚えました。

というのは、さっきの川崎の方たちの条例は、子ども用の解説のようなものがあつたじゃないですか。それを見て初めて子どもは、あっ、こういうのがあるんだって理解できるんですよ。それなのに、子どもの権利を守るといふものなのに、国が出しているものが、子どもが読んでわからないものでは意味がないのではないかと思います。私もどこでこの権利を守られるんだろというふうに思っていたけれども、その法律を読んでも何かわかりづらくて、どういうぐあいに使っているのかもわからないような気がしました。それでは子どもの人権って守られるのかなとか、政府って本当にやる気があるのかなというふうに思いました。

政府に本当にやる気があるのかなって思ったときに、私はある弁護士さんに質問してみたんですよ。政府はやる気があるんですかって。でも、そこで私は恥ずかしいなっていうふうに自分で思いました。というのは、政府は国民の声を聞いて、それを反映させる機関なわけで、政府がやらないのは国民の声が少ないからだっというふうにその方はおっしゃったんです。私たちがもつとこの問題に対して声を上げていけば政府も動くのではないかと思います。私も「許せない」とか思っても言っていないかなっていうふうに思います。世間にアピールもなかなかできないし、広めることも十分ではない。自分の中

で悪いなっていうふうに、何かおかしいというふうに思うだけで、政府の人に言ったわけでもないし、それじゃあ、本当に私にやる気があるのかなっていうふうに思いました。でも、私は子どもをこのように買ったりと、性的に、また、様々なかたちで心も体も傷つけるということが本当に許せなくて、本当にあつてはいけないことだと思っています。今までできなかった、広めることやアピールが一二月の横浜会議で出来ると思います。

さっき絵本を読んで、私は、最初は、あつ、こういうことが起きているんだっていうふうに理解したと思っていたんですけど、本当にそれは外国で起こっていて、日本から男の人が買いに行っている、女の人が買いに行っている場合もある、それが恥ずかしいな、私と同じ年齢の子たちが日本から行った男の人に搾取を受けているんだっていうことに、すごい憤りを覚えたんですけれども、でも、考えてみれば、日本にもそういう問題があつたんだ。援助交際をどうとらえるか、インターネット上で流れている写真のようなものが日本にあつたんだっていうことに気づいたんです。だから、これは決して遠くの問題ではないんです。

私たちにかかわることで、携帯とか持っていたら、絶対にいたずらメールとかが入ってきて、そういうサイトに行きましようみたいなのが入ってきたりするっていうのは、本当に私たちの問題だということを確認したんです。私は、私にできることって少ないと思うけれども、そういうふうに私が思ったんだということ伝えてきたりとか、みんなで話したりとか、ここがおかしいとか、ちゃんとおかしいことをおかしいって言おうというふうに思ったんです。

でも、私がそれを言おうと思ったときに、言う場所っていうのはとても少ないことに気づいたんですけれども、私だけかもしれないですけども、学校とかでそういうことをやろうとすると、例えば小学校でこういう話がしたいんですけど、ふうん持っていけば、小学校ではまだ早いですって言われて追い返されたりとか、学校でもそういう時間は持てませんとか、そういう形で、私の住んでいる社会では次々と遮断されていった気がします。でも、私は、私の入っているほかのNGOの

グループで学習会をしたりとか、そういうところで認めてもらって、私の参加しているのが実現していったんですけれども、私が一市民としてそういう問題を考えたことを言っていく、私が社会の中にいる一人として意見を言って、それを聞いてくれる社会っていうのは、私の中にもありました。でも、やっぱりそういうことを聞いてくれたり、私の意見を聞いてくれるところは少ないのかなっていうふうに少し思ったんです。

でも、この問題はみんなの問題であって、決して大人たちが考えて、法律をつくって、それで解決するっていう問題ではないということがわかったんです。というのは、今つくっている法律っていうのは、やっぱり大人の人たちが考えて、施行していこうというふうに一応しているものじゃないですか。でも、それでちゃんと捕まったのは三件だけ。しかも、この間の一件だけが子ども買春の罪。それはおかしいと思ったんです。

私たちも思っていることを言って、ここをこう変えてほしいとか、私たちの問題なんだから、ちゃんと言わなきゃいけないし、聞き入れる体制がないといけないと思っただんです。それが市民の参加だと私は思います。

この問題については、もつといろんな人の意見が反映されるべきだと思うんですよ。というのは、大人が気づくところもあれば子どもが気づくところもあるし、大人が子どもを買っていたりとか、そういうことだったら、世界というのは大人と子どもがいて成り立っているわけなんだから、大人の意見も子どもの意見も聞かなかつたらよくないと思います。絶対に大人だけの社会で考えちゃったら、子どもがそれを使えないとか、そういうことも出てくるわけじゃないですか。だから、みんながいけないって思って行動する、それが、みんなっていう中に子どもも大人も対等に入って、みんながそれをちゃんと、大人の意見を聞いて、子どもの意見を聞いて、それが一つになってみんなの意見になって、進んでいけたら、この世界も変わるし、この問題はなくなっていくたりとかするんじゃないかなっていうふうに私は思いました。

でも、それは日本だけの問題じゃなくて、やっぱり日本に働きに来る、また来たい子どもも、やっぱり日本は物価が高い

からいるんですよ。まず貧困の問題がありますよね。でも、日本に来る間には、例えばミャンマーからタイに渡ってきて、タイから日本とか、そういう国際的なルートがあつたりとかするわけじゃないですか。ということは、日本だけが気をつけても仕方がないし、タイだけがやっても仕方がない。そしてルートを遮断して、その子どもがたすかるとはいえない。生計がたてられない現状はかわっていないわけですから。よって、世界すべての人々の協力が必要なんだっていうことがわかりました。でも、いけないんだっていうふうに思っている人は世界各国にいます。だから、そういう人たちの気持ちの一つになるようにみんなで話し合うということが本当に必要で、子どもにわかる気持ちとか、大人にわかる気持ちとか、みんなで話し合って、この問題を解決していけたらと思います。

飯田　こんにちは。アジアの女性と子どもネットワーク・AWCというNGOのユースアソシエーション・AYAというグループに所属しております、飯田と申します。

AWCという団体は、一九九六年に、タイで子どもの商業的性的搾取という問題を初めて目の当たりにした母親五人が、母親の視点から何か行動を起こさなくてはと、立ち上げたことが始まりです。

主に、タイの山岳地帯に学校を建設したり、性的搾取の被害から救出された子どもたちを保護する施設を支援したり、また、日本国内で、より多くの人にこの問題を知って戴くために、シンポジウムを開催しています。

日本が子どもの権利条約に批准した、四月二〇日に合わせて毎年、シンポジウムを行っています。そして二〇〇〇年四月のシンポジウムの開催に向けて、それまで個人個人で活動していた若者達が集まって、この問題を若者の視点で捉えて活動をしようとして、AYAが結成されました。

私になぜ、この子どもの商業的性的搾取という問題に取り組み始めたかをお話しします。

私は今、二三歳なんですけれども、一五歳の時に知人に、日本語があまり話せない子どもがいるので相手をして欲しいと

言われて行ったところに、一〇歳前後の子どもたちが、この教室くらいの大きさの部屋にひしめき合っていました。

私が「こんにちは」や、「ハロー」と言っても、「反応をしてくれなかったので、私は持っていた写真を見せて、自分がどういう生活をしているのかを一人で勝手に話し出しました。そうしたらみんな、興味を示して一斉に飛び掛かってきたのです。写真には、友達の写真、学校の写真などがあつて、教室で椅子と机がならんである写真を見て、これは何だと聞くので、スクール、というと、初めてそこで、学校がどういう場所かを知ったのですね。それが一〇歳前後の子どもたちでした。

どんどん話をしていくうちに、彼女たちも写真を見せてくれたのですが、その写真というのが、鶏が群がっている写真やこういう普通のテーブルにご飯やサラダ、他のお料理が乗っている写真や、洗濯機や電子レンジがポンと写っていたりしました。人間が写っている写真は、家の前に家族が並んで、別に笑顔もなく写っているものです。この写真が何かを聞いたなら、これは私が稼いでお金で買った、全ての財産だと言われました。意味を理解できず、どういう意味かをもう一度聞き直したら、日本人のあなたには解らない。と、言われました。

彼女たちは、日本に売られて来た、買春の被害に遭っている子どもたちだったのです。

その時初めて、私は、この、子どもの商業的性的搾取の実体を知り、絶対にこの問題は無くさなくては、根絶しなくては、と思つて、自分なりにできることを始めました。

もちろん、まだこのようにNGOに関わる前ですから、個人でできることは限られていましたが、例えば、学校の中で、このことについて話したり、また、色々な人と、出逢い、話を聞いたりしました。

それがきっかけで、私は、援助交際をしている特に、女子中高生、大学生、その他にも様々な人たちからお話を聞くと言うことを始めました。

その中から、様々な現実が見えてきました。例えば、先程から話に出ているアジア、アフリカその他中南米などで起きて

いる、この問題に関しては、多くの人が問題意識を持って取り組んでいます。もちろん、それはとても素晴らしいと思いますが、それでは、日本国内の問題に目を向けて、援助交際に関してはどうか。大人が子どもの性を買うと言うことには、何も変わりはないけれど、対応は変化します。

そこで、では、買っている男性にとつては、どうなんだろう。どこが違って、どこが同じなんだろう。それを知りたくなつて、今度は買春をしている男性に話を聞くことを始めました。

ある男性から、なぜ、おとなではなく子どもを買うのか、と言う質問に対して、次のような返事を貰いました。子どもは、逆らわない、もし逆らつてもおとなには勝てない、病気がない、身体が小さい、思い通りになる、恥じらいがある、肌がきれい、尊敬のまなざしで大人を見る、セックスをするときは、性器と身体が小さいほど気持ちがいい、思春期に当たる年齢を犯すことはとても気持ちがいい。また、これらの要素が正しいことは、援助交際、子ども相手のセックスツアーなどの需要過多により客観的に証明されている。

その彼が、今まで生きてきた人生において、性教育とは、からだのつくりしか教わらず、その他の性に関する情報は、全てアダルトビデオの中で学んだというのです。

彼が見たそれらのビデオには、暴力的なセックスのシーンが多く、また、それを女性が喜んでいるものがほとんどなのだそうです。

買う側、売られる側、それぞれ、様々な背景があり、それらが全て入り組んで、この子どもの商業的性的搾取の問題が発生しています。

その様な状況の中で、私たちは何ができるか。どこかの団体に関わるだけが、最良の方法では無いと思います。けれども、もしNGOに関わるのであれば、絶対に、この問題を無くしていこうと、同じNGOに属する方々ともに、諦めないでこの

思いを持ち続けて欲しいと思います。そこから、本当に、最初は、草の根の一步だけでも、進んでいくと思います。ただ、誰かの話に耳を傾げるだけでも、また、議論することでも、全てが、この問題を根絶するために、必要なプロセスだと思います。

私自身、NGOに関わる中で、同じ思いを持った仲間と出逢うことができませんが、もしかしたら、偏った考えの人だけしか、集まっていないかも知れない。もっと幅広い視野で意見を言い合える人に、たくさん出逢いたいと思います。

今年の一月一七日から二十日まで、子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議というのが横浜市のパシフィコ横浜の中で行われるんですね。第一回は一九九六年にスウェーデンのストックホルムで開かれました。その際、日本からは当初、日本に関係のない問題として、政府からの参加予定は無かったのですが、実際参加したら、世界中に出回っている子どもポルノの約七十%が日本からされている、名指しで日本は子ども買春・ポルノの加害大国として世界中から批判を受けました。そこで、帰国後、会議に参加した国会議員を中心に、子ども買春・子どもポルノ禁止法を作り、その他、各機関やNGOが協力し合ってフォローアップを重ね、今度は日本で行うことになりました。

それに向けて、今は調査等を行っていますが、やはり、その会議が終わった後が一番大切だと思います。世界会議で全ての問題が解決されるわけではないので、その後からまた、始まっていくはずですよ。その時に、皆さんの力が私はとても重要だと思います。もし何もせずにはいられない、何か、行動を起こそう、と思ったときには、必ず、一緒に行動してください。仲間を持って、一緒になって行動を起こして欲しい、そう思っています。

話が散乱してしまっただんですが、それが私がNGOでやっていることです。ありがとうございました。